

## 巻 頭 言

### 独立行政法人化をむかえて

工作センター長 松 内 一 雄

変革が起ころうとしています。

表題の独法化がほぼ一年後に始まろうとしています。現在、どこに属し、どのような管理で運営されていくのかまったく検討が付きません。このような業務がどのような形で引き継がれていくのかも未知数です。

ともあれ、当センターは筑波大学の支援センターとしてこれまで多く依頼業務をこなしてきました。「ものづくり」を基盤とする業務です。同一品の大量加工はあまり得意としません。研究に密着した極めて特殊なものを不完全な図面から作り上げるのをやりがいとしてきました。ほとんどが単品です。学生・教官が実際に工具を使い、簡単なものなら自分で加工が出来るように、実技講習会も開いてきました。大学の支援センターならではの特徴でしょう。これなしにはセンターの存在意味はありません。学外の業者とは住み分けています。

最近、あちらこちらで統合合併が相次いでいます。工作センターの行く先はまだ見えませんが、独立した組織として存在することはほぼないでしょう。大きな組織の一部として活躍の場を見出すことになると思っています。このとき、このものづくりを大学に、世の中にいかにアピールしていくかが重要になります。独自色を出し、存在意義を問えなければ消え去るしかありません。

ほかに問題も抱えています。技術のレベルを握る技官の年齢が高いことです。技術を伝承する上では悩ましい問題です。また、地域との関係も今後重要になるでしょう。研究学園都市は多くの研究機関を抱えています。地域連携、委託研究等、周りとのようなスタンスで付き合っていくのか、この問題も考えていかなければなりません。

ともかくも、科学技術の基盤にあるのはものづくりでしょう。国も基盤技術振興法を策定し、科学技術の発展を支えようとしています。ものづくりの重要性と大学での役割を多くの人に考えていただき、お知恵を拝借し今後の運営を考えていきたいと思っています。